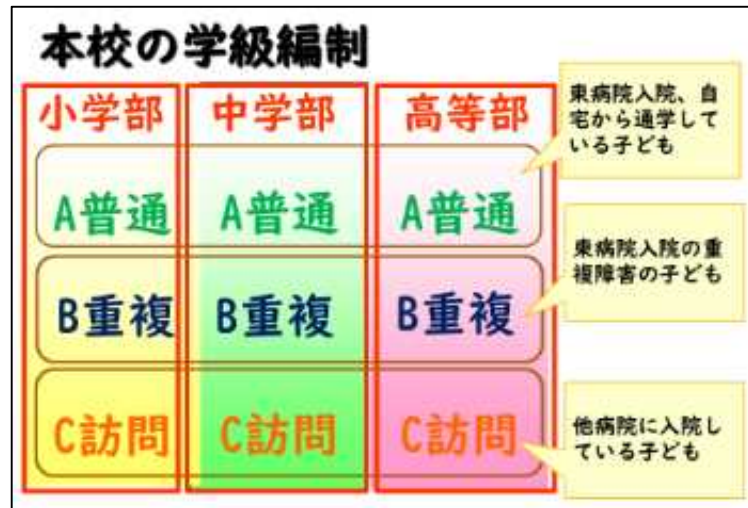


## 1. 本校の児童生徒の実態

千葉県立仁戸名特別支援学校は昭和52年に国立療養所千葉東病院内仮校舎で開校し、開校当時は、慢性腎炎やネフローゼ症候群、重度重複障害の児童生徒が多く在籍していた。現在は、慢性腎疾患やネフローゼ症候群の児童生徒の入院は短期間となっており、3ヶ月程度の入院治療後、前籍校に戻っている。また、千葉・市原市内の関係している病院へ1ヶ月以上入院している児童生徒に対し、病院を訪問して指導を行っている。本校には、小学部・中学部・高等部があり、各学部に普通学級・重複学級・訪問学級、それ



ぞれの教育課程で指導を行なっている。学校や病院において学習ができる特徴がある。また、医療と連携を緊密にとり、児童生徒の病状や注意事項を常に把握している。授業中に容態の急変もありうることから、目を離すことで、重大事故に直結するかもしれないという想定の上、常に授業を行っている。児童生徒一人一人の病状や体調、治療計画に合わせたサポートをするため、病棟ごとの連絡会やカンファレンスを行い、医師から病状や治療経過を、看護師長からは病棟生活の様子を、学校職員からは学校生活の様子を伝え、相互理解につとめている。各医療機関と連携し、学習場所や時間、学習の仕方や運動量、入院や病気による不安等の心理面にも配慮している。児童生徒の入退院は、転籍することになるため、例年、100～130件が発生する。教育課程は、小・中・高校に準ずる教育課程に加え、下学年対応の教育課程も取り入れている。重度重複障害の児童生徒については、自立活動を主とした教育課程で指導している。

## 2. 「絆づくり」への取り組み

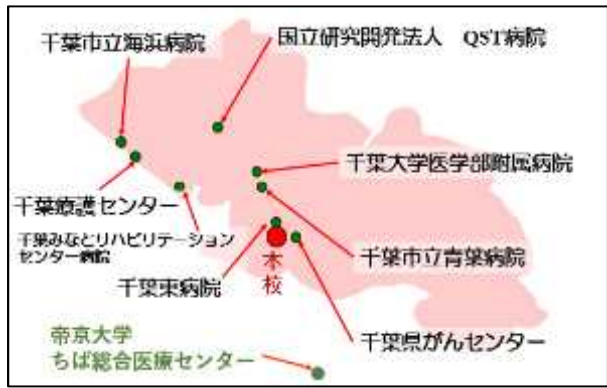
病弱特別支援学校において、感染症による罹患への対策や入院期間により生徒の転出入が頻繁に行なわれる本校では、児童生徒と教師、1対1の授業の場面が多くなる。そのため、集団での授業や活動が遠のいてしまい、他者とのつながりを保っていくための方法を模索している状況である。一方で、遠隔授業への取組は長く、治療等で病院内の院内学級への登校もできない児童生徒は病室で授業を受けることもある。また、オンラインで普通学級、重複学級(床上学級含む)、訪問学級(各病院)をつなぎ、学校行事を行なっている。児童生徒会の行事は、自分たちが進行をすることで、本校の児童生徒であるという意識づけや他者との協力や支援を行う場の提供となっている。

また、入院中の児童生徒の保護者は自由に面会ができない。特にこの数年の感染症対策は保護者の面会さえ制限されていた中、学習保障として学校職員の指導は継続できていた。オンラインの学校行事などを増やすことで、保護者も参加した家族の「絆づくり」の一端を担うことができると考える。

学校の教育活動全体を通して、本校と入院先の各病院、病弱特別支援学校同士のつながりを意識し、支え合いや助け合いを行うことで、児童生徒を中心とした人と人とを結びつけることを意識する「絆づくり」を重視している。

## ① 儀式

隣接している千葉東病院を始め、千葉市内の7つの病院、市原市の帝京大学ちば総合医療センターと連携している。学校と在籍児童生徒がいる各病院をオンラインでつないで儀式を行っている。分散して実施できるものは、校長が病院に行き、一人一人顔を見ながら行う。学校だけでなく、様々な場所をつなげて思いを共有している。



<本校と連携している病院>



本校体育館



大学病院



千葉東病院



本校プレイルーム

※写真1～4 <各会場での入学式の様子>

今年度の入学式は、コロナ禍の影響で病院からの指示により、病棟生と通学生を2部に分けての実施となった。普通学級と訪問学級が本校体育館で病棟とオンラインでつないで行い、重複学級は病棟で行い、お互いの式をオンラインで視聴する形となった。

## ② 児童生徒会役員選挙

選挙の告示ポスターを貼り出し、校内に選挙活動を周知した。感染状況を鑑み、立会演説会は行わず、立候補者の演説ビデオを動画撮影し、校内サーバーにアップしたことで、各学級の授業や児童生徒の体調に合わせて視聴できた。

期日前投票や代理投票を設け、登校が難しい児童生徒は各病院から投票し、選挙に参加した。

※写真5 <自分で考えながら投票している様子>

選挙管理委員会から借用して本物の記述台、投票箱で選挙を行っている。



### ③ 授業

I C Tを利活用し、遠隔教育を行っている。病気や治療の状況により登校できなくても、ベッドサイドや自宅と教室をつないで同時双方向型の授業を行っている。教室で一緒に授業を受けられたり、遠隔でもクラスメイトと一緒に授業を受けたりすることができることは、病気と向き合い、治療を受けながら学習に取り組む児童生徒にとって、生活の励みとなっている。



※写真6 <自宅とつないで授業>

自宅療養中は、自宅と教室をつないで同時双方向型の授業を行っている。



※写真7 <学校で友達と一緒に授業>

学校では同学年の友達と一緒に対面で授業を行っている。



※写真8 <病室内でベッドの上で授業>

教員がベッドサイドに出向き、ベッドの上でタブレットを使って理科の実験を視聴して学習する。



※写真9 <病院内の院内教室で授業>

体調に合わせて病院内の教室に来て対面で授業を受けることもできる。

### ④ 児童生徒総会

『児童生徒総会』は、学校運営を担う大切な児童生徒会活動である。今年度は、体育館・プレイルーム・中学部・高等部重複学級と2つの病院の訪問学級、全6カ所を遠隔でつないで行った。

それぞれの場所で、「承認ボード」を緊張しながら掲げる子がいたり、会の進行をじっくり視聴する子がいたり、様々な表情が見られた。友達に会うこと、画面越しで学校とつながることの嬉しさが、子供達の明るい笑顔と会話に表れていた。



※写真10 <オンラインで児童生徒総会>

生徒会役員が体育館で司会進行を務め、画面ごしに決議する。



体育館



本校重複学級教室

※写真 11、12 <議題に対して承認ボードをあげている様子>

普通学級は体育館で、承認ボードを、重複学級は教室で承認ボードを画面に向けて出している。

### ⑤ 文化祭（にとな祭）等の集会

文化祭や各種の集会も互いの顔が見えるように工夫して実施している。一方方向ではなく、可能な範囲で、双方向で話しかけたり、答えたりという場面を作っている。クイズやゲームを行い、みんなで参加するなど、つながりを味わうことのできる大切な取組の1つである。



6 か所同時中継



開会のあいさつ

※写真 13～16

オンライン会議システムにより、体育館、教室、病棟等いろいろな場所から集会に参加している。お互いの顔を見ながらクイズ大会に参加したり、司会進行をしたりしている。

## ⑥ オンラインスポーツ

登校した生徒だけでなく、運動制限があっても病室で参加できるようなスポーツを考案し、実施している。病院のベッドサイドでも参加することができる種目は、ホワイトボードにコートを作成し、おはじきをボールにして、「ミニクロ」という競技を行う。記録を基に順位を競い、表彰した。本校だけでなく、病弱特別支援学校の県立四街道特別支援学校の生徒も記録を提出して、交流を深めている。外部の大会に参加することが難しい病弱の児童生徒が、それぞれの場からオンラインで参加し、「ミニクロ」を通して交流を深めることは貴重な機会である。



※写真 17～19<クロッカー大会の様子>

実際にプレイできる生徒は団体競技を行うが、病室ではベッドからおはじきを使って個人競技を行うこともできる。今年度の「ミニクロ」は、ベッド上からおはじきで参加しオンラインで中継。0 cmという記録を出し優勝、各会場からどよめきが起こった。

同時中継できない場合は、あらかじめ記録を取りエントリーして競うこともできる。

## ⑦ ロボットプログラミング選手権

病気療養中の児童生徒の遠隔教育を推進することを目的に、「プログラミング教育」として、ICT 機器等を活用したオンラインでの大会が全国規模で開催されている。

この大会は、プロロというロボットにプログラムを入力し、土俵の上で相撲を取る競技で、関東大会、全国大会が開催されている。県内だけでなく、通常では関わることのない、さまざまな地域の児童生徒と交流し、つながることは、非常に有意義である。



※写真 20、21<ロボットプログラミング選手権の様子>

全国の学校からチームがエントリーしたプログラムで「プロロ」が相撲を取る様子を、各学校からオンラインで観戦し応援する。トーナメント表に記入しながら対戦相手を予想し、試合の行方を楽しみに、応援に力が入る。

※各行事、掲載写真については、本校ホームページ新着情報に随時掲載している。

### 3. 実践と今後について

遠隔教育で双方向通信ができることは、病弱教育において大きな発展となっている。「ICT利活用による教育の質の向上」の研究を生かし、学校行事等から取り組んできた。普通学級では、学校にいる教師と自宅や病室にいる児童生徒が iPad 等を使用し、画面越しの対面で授業をおこなっている。重複学級の児童生徒は、病院内から儀式や児童生徒総会に参加することができ、長期入院の生活の中で励みとなっている。また、訪問学級の児童生徒は、ベッド上からも学校行事にクイズやゲームで参加できるようになった。このようなつながりは、校内にとどまらず、県内の特別支援学校・大会等を通じて全国の特別支援学校へ広がっており、本校も率先して参加している。

今後は、病院の入退院と連動して本校に転出入する病気を抱えた児童生徒が、学校間の遠隔教育等で連携することでスムーズに前籍校に戻れるようつながったり、保護者も参加できる学校行事を増やすことなどでつながりを増やしていきたい。このような取り組みが児童生徒の人生の「絆づくり」の基礎となることを目指したい。